明治大学
MEIJI UNIVERSITY

平和教育登戸研究所資料館だより

明治大学
公式キャラクター
めいじろう

2020 年 7 月 1 日
第 19 号

この度，新型コロナウイルス感染症拡大防止のための長期臨時休館により，
皆様へご不便をおかけしておりますことを心よりお詫び申し上げます。
現在，再開に向けて準備中ですが，引き続き，
明治大学平和教育登戸研究所資料館を何卒よろしくお願い申し上げます。

登戸研究所資料館は 2020 年 3 月 29 日 開館 10 周年を迎えました

2019 年度企画展 少女が残した登戸研究所の記録 —陸軍登戸出張所開設 80 年— 再開後に会期延長

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため，第 10 回企画展「少女が残した登戸研究所の記録　- 陸軍登戸出張所開設 80 年 -」は会期を約一か月残し，登戸研究所資料館は臨時休館にすることになりました。気候が暖かくなるのを待ってのご来館を楽しみにされていたお客様には心よりお詫び申し上げます。ですがこのたび，資料館が再開しましたら企画展の会期を延長することを決定しました。再開時期および延長期間は現在未定ですが，決定次第 HP または SNS でお知らせします。

企画展のタイトルになっている，少女が残した登戸研究所の記録というのは『雑書綴』と名付けられた約 1,000 枚のタイプ文書の綴のことで，登戸研究所第二科の元タイピストとして働いていた少女が戦後，大切に保管していたものです。この少女が残した『雑書綴』の中には一体どのような資料が綴られているのか，またそこからどんな登戸研究所の実態が明るみになるのか。今回の企画展では，その謎に迫っています。是非お見逃しなく！

写真左下：少女が残した登戸研究所の記録『雑書綴』。中には少女が描いた挿絵も。左上：この度の企画展のポスターには『雑書綴』の表紙が。右上：ある少女は，左側の関コトさんという名の少女でした。コトさんは 15 歳で登戸研究所に勤め始めタイピストとしての技術の向上のために『雑書綴』を大切に綴りました。（写真提供：小林郁久氏）

「帝銀事件講演会」開催します

今年 3 月に開催告知をしていました「帝銀事件講演会」は再開後に開催します！楽しみにされているお客様にはお待たせし申し訳ございません。後日改めて日時を告知いたします。当館公式ウェブサイトや SNS（Twitter, Facebook, Instagram）にてご確認ください。

（この頁，椎名真帆）

シリーズ Q&A

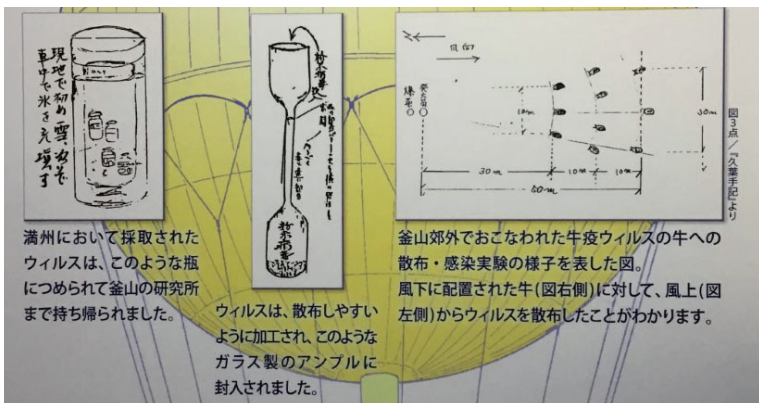
第十五回 「登戸研究所はウイルス兵器を開発していた？」

世界中を混乱に陥れている新型コロナウイルス。これには人間がウイルス兵器として開発したものが研究所から漏れてしまったのではないか？という噂もあります。ウイルス兵器の開発，というとアニメーションやドラマの中の世界だけの話と感じがちですが，登戸研究所では実際に行われていました。

例えば、家畜を全滅させ米国を混乱に陥れようと風船爆弾への搭載計画があった「牛疫ウイルス」。これは登戸研究所第二科が中心となり兵器化したものです。牛疫の世界的権威である朝鮮総督府家畜衛生研究所（釜山）の中村稔治（じゅんじ）博士らに研究を委嘱，そこへ第二科研究員の久葉昇らを派遣し，気温 -50 度ともいう風船爆弾の飛行高度 10,000m を通過しても効果を失わないよう乾燥粉末化に成功、また強毒病毒を分離し毒性を強化しました。釜山では実戦用空中散布実験も行い、実験用の牛 10 頭が全て感染、一週間で全頭死に至りました。

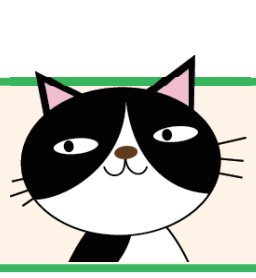
効果も実証でき、いざ風船爆弾に搭載しようとしていましたが、アメリカの報復を恐れた東条英機首相兼陸相に止められた，と久葉は回顧してます。

風船爆弾搭載のウイルス開発に関する資料は『雑書綴』にも綴られており，今回の企画展でも取り上げています。戦後記された久葉昇の手記にはこの開発過程が 8 点の図と共に克明に記されています。企画展会期内は全文を手に取りご覧いただけます。是非一度ご覧ください。



第一展示室でも「久葉手記」を一部紹介しています。（左は第一展示室のパネルより）

渡辺先生斯（か）く語りき 第五回



雑書綴が教えてくれたこと

資料館の非公式看板猫ふみふみちゃん（以下ふ）が，渡辺賢二先生（以下わ）から，四半世紀以上にわたる調査の秘話を聞くコーナーです。

ふ「前の号で言ってた『雑書綴』って，どんな中身なのかしら。気になってお昼寝もできないわ。」

わ「登戸研究所の第二科の研究内容やその様子がわかる書類が約 1,000 枚綴られているんですよ。例えば，ハブより強い毒の蛇毒の購入伝票だったり。」

ふ「ヘビ！どうも苦手ね。先生，生田キャンパスでも，青大将に出会うと，シャーッって言っちゃうわ。」

わ「毒といえば，登戸では青酸ニトリ―ルという高性能の毒薬を開発しましたが，その保管のために真冬でも購入した大量の氷の伝票など，毒の研究を表す書類は『雑書綴』たくさんあります。」

ふ「なんだかお口の中が苦くなってきちゃうわ。」

わ「あと，いろいろと登戸研究所の様子がわかる資料もあるんですよ。科長が変わった時に『勤務時間中の散髪禁止』命令とか。裏を返せば，それまでは勤務時間の散髪が許されていたのか，と。」

ふ「今はそんなのダメじゃない！登戸研究所ってのんびりした様子だったっていうのは本当なのね。」

わ「のんびりというか，研究所内ではご近所付き合いが反映されていたこともあるようです。『雑書綴』を少女が持ち帰ろうとしたとき，守衛さんが許可してくれたから持ち帰られた，とお話しましたが，その守衛さんは，地元の有力者の家の人で，あの守衛さんがいいって言ったらいいんだ，ということがあったようです。ご近所の顔見知りのような関係の人たちもい多かったみたいですよ。」

ふ「なんだか一気に井戸端会議感がでてきたわね。研究所では噂話もすぐ広まっちゃいそう！先生，今日もお話面白かったわ。また次回を楽しみにしてます。」　（第五回　おわり）

（この頁，椎名真帆）

特別寄稿：アルバイト職員のエッセイ
「登戸研究所資料館で働くということ」①

■　登戸研究所資料館には，現在，大学院生を中心に５人のアルバイトの職員が勤務しており，団体のお客様への展示案内や，資料整理を補佐してもらっています。中には，ガイドが大好評でファンレターのようなお礼状をいただくことも。そんなみなさんに，休館のステイホーム期間中に「登戸研究所資料館で働くということ」をテーマにエッセイを書いてもらいました。今回と次回の２回でご紹介します。

私は、資料館の活動が歴史教育や平和教育に活かせると思い、大学院生時代に働き始めました。大学院を修了した現在も、中学・高校で非常勤講師をしながら資料館に勤務しています。

資料館のガイドで大切していることは、学校で教える「歴史」の中で、登戸研究所の位置づけや意義を明確にすることです。例えば、登戸研究所は、その前身である陸軍科学研究所時代に日本の秘密戦の端緒を開きました。陸軍科学研究所は第一次世界大戦が総力戦となったことを踏まえて設置されたものです。その後の軍拡競争や、日本が戦争へ進んでいく中で情報戦が活発化し、日本でも秘密戦研究の重要度が増して1937年に登戸実験場を開設、その研究規模を拡大させていきました。こうした通史との紐付けは、私が山田朗教授から学んできたことでもあります。

登戸研究所の歴史を紐解くと、科学研究の発展が戦争の拡大と表裏一体をなしていることは明白です。また、そこには様々な立場の人が動員されました。登戸研究所の歴史を掘り起こした高校生たちの活動は、そのような埋もれてしまいそうだった重要な事実を伝えてくれました。このように、歴史には様々な材料（史料）から過去を冷静に省みて、未来につなげる大切な役割があります。また、歴史からは論理的な思考力を学べると思っています。こうした学びはどの世代でも大切な学びだと感じており、私はその学びの一助となることを、資料館や教育現場から発信したいと考えています。（石井靖子）

冒頭から私事にわたりますが、私は開館から間もない時期に本館と出会って以来、短くない時間を館と過ごして参りました。そうした時間や出会いの中で抱いた想いを、雑ぱくに記してみたく思います。

戦争を経験された世代の方が、戦後に戦争体験や直間接的な旧軍との関わりなどを話されるまでには、何かのきっかけや、長短の時間の経過が必要なことは多いかと思います。伴繁雄氏にとっての高校生との邂逅（かいこう）も、そうした例の一つと思います。一方で、ある軍学校生徒として終戦を迎えた私の母方の祖父のように、身内にも自身の体験を話さないまま世を去るケースもあるでしょう。

かつて多様な形で登戸研究所と関わられた方が、本館に当時のことを語って下さる様子は、思いがけなくも人道面で問題のある「秘密戦」に関与してしまった立場としての複雑な思いと共に、登戸地域で暮らす一住民としての、生活の一面をのぞかせる雰囲気があるように感じます（ここでは、近隣にお住まいで、当時軍人・軍属でなかった方を想定しております）。このことは、「大日本帝国」の国家・国民・国力を総動員しての戦争遂行には、軍部や産業界の力だけでなく、民間人が生活の最中で行っていた勤めをも必要としていたことをうかがわせます。それと共に、そこからは、近現代の戦争は、民間人が何気なく従事していた仕事が、図らずも戦争協力につながってしまう恐怖が潜んでいることも、ここから読みとれるような気が致しております。（竹ヶ原 康佑）

資料館ニュース

■ まだまだ出てくる！登戸研究所の新証言

市民が主体となって活動している「稲田郷土史会」、「登戸研究所保存の会」と共同で、昨年１１月より地域在住の元登戸研究所勤務員の調査と聞き取り活動を進めています。現在までに、第一科二班（特殊無線機担当）、第一科三班（怪力電波兵器担当）、第四科研究班から製造班、第三科中央班（偽札の製版担当）を渡り歩いた方３名の聞き取りを行ったほか、研究所当時の写真アルバムや文集の提供を受けました。登戸研究所では当時軍事機密を扱う事項もあったこと、また、戦争の記憶をわざわざ話したくないというお気持ちから、聞き取り活動は困難を伴うこともあります。しかし、今回は地域の信頼を得ている市民とともに共同ですすめたことで、資料館だけでは得ることができなかった証言も伺うことができました。聞き取り活動は地域の信頼があってこそ、そして地域の支えがあってこそ進められる活動だということを改めて感じました。それでは今回新たにわかったことをご紹介します。

特殊無線機については、高野泰秋少佐の下、諜報活動用のものが開発・製造されていたことはわかっていました。高野少佐の班で働いた方から、その無線機を1944年～1945年に東京都杉並区高井戸にあった「トクシュサンボウ」へ納入したということを今回初めてお伺いしました。高井戸には、浴風会を陸軍が接収し開設した「陸軍中央特種参謀」があったことは明らかになっておりi、登戸研究所が何か関係があるのではないかと推測されていましたが、この証言でその可能性が高まりました。「トクシュサンボウ」内では、常に傍受した音（英語）が飛び交い、レシーバーをつけた人たちがたくさんいたそうです。彼らの中には「アメリカ関係、いわゆる捕虜の人」もいたと、当時少年工員だった証言者はお話ししてくださいました。この証言をもとに当館では今後、さらなる調査を進めていきます。

戦後75年を迎える今年、一番若手だった元勤務員も90歳を迎えようとしています。今後、ご本人から証言を得る事が難しくなっていく中、新たな証言を得られたことは大きな成果でした。今後も折をみてこちらでご紹介していきます。（塚本百合子）

i 杉並区郷土博物館『企画展 すぎなみの地域史Ⅱ 高井戸』（杉並区郷土博物館、2018）

資料館からのお知らせ

■ #Stayhome で登戸研究所資料館　発信中

休館期間が長引く中，登戸研究所資料館はSNS（Twitter, Facebook, Instagram）でバーチャル来館体験「#Stayhome で登戸研究所資料館」を発信中です。まだご来館されていない方も，リピーターの方も，どちらも楽しめるコンテンツにしています。皆様のアクセスをお待ちしております。

■ 登戸研究所資料館「10年のあゆみ」発行

登戸研究所資料館は2020年3月29日に開館10周年を迎えました。これを機に，開館以来これまでの当館の活動のすべてをまとめた「明治大学平和教育登戸研究所資料館　開館10周年記念誌　10年のあゆみ」を発行しました。再開時にはご来館者へ無料で頒布します。

（椎名真帆）

編集・発行：明治大学平和教育登戸研究所資料館
発　行　日：2020年7月1日
〒214-8571　神奈川県川崎市多摩区東三田1-1-1
明治大学生田キャンパス
TEL/FAX：044-934-7993
E-mail：noborito@mics.meiji.ac.jp
URL：http://www.meiji.ac.jp/noborito/index.html
twitter https://twitter.com/meiji_noborito
facebook https://www.facebook.com/Noboritoshiryoukan
Instagram https://www.instagram.com/meiji_noborito/

※現在休館中です。
新型コロナウイルス感染予防対策のため，引き続き大学構内には一般の方がお入りいただくことができません。
再開の目途が立ちましたら，当館公式HPやSNSにてお知らせします。
ご迷惑をおかけし大変申し訳ございませんが，資料館再開まで今しばらくお待ちください。

2020年6月30日現在の累計来館者数は80,298名です